

書評

[評者]
加部一彦
愛育病院新生児科



臨床医のための パブリックヘルス

相澤好治 監修
和田耕治・太田 寛 編集

A5 頁178 2010年
定価 2,940 円(本体 2,800 円+税 5%)
[ISBN 978-4-498-07110-0] 中外医学社刊

その昔、医学生だった時代に、確かに「公衆衛生学」の講義を受け、実習を行い、医師国家試験の受験勉強でも「公衆衛生」を勉強した記憶がある。が、しかし、あれから 20 有余年の歳月が流れた今、「公衆衛生」はなんと縁遠く感じられるだろう。医師法の第一条には医師の職務として「公衆衛生の向上及び増進に寄与」することが記されているにもかかわらず、一体、なんでそうなったのか？ 医学教育の中で「公衆衛生」の占める位置は、臨床各科に比べてはるかに低い。それすなわち、日本の医学界では「公衆衛生」がそれほど重要視されていないことを意味しているのだろう。医師法に規定される「医師の職務」にもかかわらず……。

今回、本書を手にし、まずバラバラとながめてみて、とにかく驚いた。堅苦しい「公衆衛生」が「パブリックヘルス」になっただけ(そもそも何で「公衆衛生」と訳したのだろうか?)で、これほどまでに受ける印象が違うのか、いや、これほど幅広い問題を扱う学問だったとは、改めて自分の不勉強を思い知らされた。目の前に出現する個別的患者さんの問題を解決する日々を送っているだけで、医師として十分責任を果たしてきたと思いたいが、いやはや、どうも視野が狭すぎたようだ。これからの医師は、日常臨床においても、

単に医学に留まることなく、健康や環境、疫学といった公衆衛生的(パブリックヘルス的)視点をもち社会とかかわりをもっていくことが必要だ。そのためにまずは身近なところ、身の回りの諸問題をパブリックヘルスの視点から捉え直してみたらどうだろうか。筆者は「医療崩壊」が最も危機的状况にあると言われる周産期医療に従事してきたが、単に「崩壊、崩壊」と言っているだけでなく、専門家であるならば、「それをどうしたらよいのか」といった視点で物事を考える必要があることを改めて学ばせて頂いた。非常にコンパクトにまとめられた本書には、その分、つまみ足りない所や、表面的な紹介に終わってしまっている部分も見られるが、各章の始めに設けられた「エッセンス」と章末の「さらに勉強するために」は、芽生えた問題意識をさらにつぎ詰めて行くために役立つガイドになっている。また「コラム」では知っておきたいデータや法律について、これまたコンパクトに解説されており、大変参考になった。本書は「パブリックヘルス」という大海の広がりや要領よくまとめ、今後さらに学んでいきたいとその気にさせてくれる恰好の手引きである。